

事後外部評価シート

1. 調査研究課題名 不確実性を考慮した交通行政の新たな運営方式に関する研究	
2. 有識者意見の概要及び対応 福井大学教育地域科学部助教授 手塚 広一郎	
意見の概要	意見に対する対応状況
<p>第1章、第2章のなかで言及されている不確実性・リスクの定義について</p> <p>リスクについては2つの考え方があるようです。すなわち、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ある確率変数（例えば資産価値等でラベル付けされるようなもの）の「ボラティリティ（分散）」をさして、リスクと呼ぶケース 2 資産価値やあるいは地震被害等についての「損失の期待値」をリスクというケース <p>前者は分散の幅をみてリスクの高い低いを評価するものであるのに対して、後者は何かが起こった場合に平均的にどれだけの損失が発生するか、その程度の大きさをしてリスクの高い低いをみるものです。2つのちがいは確率的な事象に対して、分散で評価するか期待値で評価するか、という点だけです。</p> <p>通常、経済学の文脈では、前者の考えで話を進めていると思います。しかしながら、人文科学のリスク・コミュニケーションといった場合には、おそらく後者を念頭においているのでは、と思います。</p> <p>したがって、第2章11ページの最初の段落の以下の文章につきましては、</p>	<p>該当部分について、指摘の趣旨を踏まえ、修正した。</p> <p>（修正部分）</p> <p>リスクとは、伝統的には、「被害の重大性と被害の生起確率の積」とされてきた。これは、リスクを確率密度分布の標準偏差（ボラティティ）と捉える金融分野の定義に対して、損失の期待値として把握していることを示す。この点で本報告書の他の部分で金融分野の定義に則して使用している「リスク」（確率密度分布の標準偏差）＝「ボラティティ」とは、厳密には異なるものであることに留意されたい。しかしながら、いずれのリスクも、確率的な事象を取り扱っている点は同じである。こうした意味で不確実な事象（いつ起きるか確実でない地震など）に関する情報をいかに伝達又は共有するかに関する研究が、リスク・コミュニケーションに関する研究である。なお、F. Knight の定義に戻ると、リスク・コミュニケーションにおける「リスク」も、何らかの損害という事象を想定し、かつ、何らかの確率を想定して期待値を考えていることから、広義の「不確実性」（生起事象が既知で生起確率が未知又は既知のもの）と同じと考えることも可能であろう。</p>

事後外部評価シート

「リスク・コミュニケーションを扱っている……人文社会科学の分野において、リスクとは伝統的には「被害の重大性と被害の生起確率の積」とされてきた。これは本報告書における「不確実性」(広義のもの)と同じに考えることが可能であろう。」

は、例えば、次のように直してみてもいいでしょう。

「……リスクとは伝統的には「被害の重大性と被害の生起確率の積」とされてきた。これは、損失の期待値をリスクとして定義していることを意味する。一方で、これまでの本報告書の不確実性の定義では主として経済学の議論をもとにボラティリティ(分散)を不確実性ないしはリスクとして捉えてきた。したがって、本章でのリスクの意味合いは若干異なることに留意されたい。しかしながら、いずれのリスクも確率的な事象を取り扱っている点では同じである。」

P7の「同じく、発見・評価段階において」になっております。

左記を踏まえ、報告書の該当箇所を修正した。